

スキエレルプ彗星に伴ふ流星群の観測 (報告概況)

山 本 一 清

本誌第87號に記した特別な流星群の観測を目的として、自分は去る六月五日朝、徳島へ向け出發した。

出發より4日以前の六月1日、自分の手許へ英國ローヤル天文學會の月刊 Monthly Notices, R. A. S., 三月號が到着した。此の中にかねて、自分が送付して置いた一文 A Meteoric Shower from Skjellerup Comet, 1927k (スキエレルプ彗星1927kより來る一流星雨) といふのが掲載されてゐたのは満足であつたが、此の文の末尾に Crommelin 老が筆を加へて

『私は輻射點の赤經を 122° と算出した。第2象限には間違ひないやうだ。赤緯は山本氏のと可なりよく一致してゐる』

と書いてあるのを見て、自分は多少不安を覺えた。そこで自分の計算帳を幾度も繰返して見たが、こちらの計算にも誤りは無い。『はて不思議な事だ、何故こんなに結果が違ふのだらう?』と變に思つたが、しかし、さにかく Crommelin 氏ほどの老練家が言ふのだから一應敬意を表しなければならぬと思つた。そこで考へて見るに、自分の計算通りならば、輻射點は三角星座であるから、流星が見えるのは早曉の東天である。しかるに Crommelin 氏の方ならば輻射點($\alpha=122^\circ$, $\delta=+39^\circ$) は山猫座であるから流星は日没後の宵の天に見えることとなる。それで此の方の観測も一應やらなければならないと思ひ、當日までに観測参加を申込んで來た多く人々にも此の事を注意する手紙を出した。

徳島へは六月五日午後4時着、上田助教授の嚴父に迎えられ、直ちに幟町の山本光晴氏方に入つた、そして幸ひ此の屋敷に廣い空地があるものだから、此所で観測するこゝめた。

しかるに徳島に着いた日から連日空は曇り續けで、人も我れも毎日心配

した。6日には市内を散歩し、7日には高等工業學校で講演なさしたが、幸ひに此の日の午後から晴れたので、日没後大に勇んで「Crommelin 流星」の
出るのを待ち望んだ、午後9時半まで空を見てゐたが、流星らしいものは
前後1時半の間に殆んど何も見えず、只9時56分頃にヘルクレス座を飛ぶ
井ンネケ流星を一つ見たのみ。空は良く澄み、月は無く、見事な晴れであ
つた。次いで翌朝(8日の朝)午前1時に床を起き出で、1時半から東の空
を見守つた。生憎此の時は既に空一ぱいに卷雲の薄いのが廣がり、月の光
りも明るかつたので、肉眼で3等星を見かねる程の空模様であつた。だか
ら始めから可なり悲觀してゐたが、午前3時半まで、前後2時間の間に、
それでも、甚だ怪しいものまで含んで、總計10個ばかりの流星を見た。し
かし圖上で見るに、此等の中の一つも豫期した三角座かららしいものは無
かつた。

六月8日の日没後と9日の早曉とは厚く曇つた。9日の午後は鳴戸の見
物に行つたが、此の日の日没後又よく晴れたけれど、自分は再び Crommelin
流星を見る勇氣が無かつた。第一、Crommelin 氏の計算が今だに腑に落ち
ないし、尙ほ7日夕刻の観測によつて、こんな流星は存在するように思は
れなかつた。

六月10日の早曉午前1時半に又眼をさました時、空には月と薄雲があつ
たけれど、とにかく見やうと思つて、やはり3時半まで天を見守つた。し
かし此の時は殆んどノートに記入するに堪えないやうな微光流星を二つ三
つ見たに過ぎず、全く失望した。それに自分の計算によれば、流星の最盛
期は8日の午後に既に去つて了つた筈である。

六月10日の午後も、其の翌曉も悲慘な曇り、

此様にして自分は六月11日に徳島を引き上げて京都に歸つた。全く此度
の行は曇天のために慘々であつた。(月だけは覺悟してゐたけれど)。自分
が徳島を観測地と選んだ理由は、和歌山の小槇氏等と、香川縣の田中朝夫
氏と協同観測をする筈であつたのだが、例の曇りにより、此の兩地方でも
観測は非常に悩まれたことであらうと思像された。果して、歸京後、各地
からの観測者の報告は悉く天氣惡を知らせて來た。

しかるに只一つ、京都に居残つた中村要氏の六月8日早曉の観測は興味深いものであつたらしい。氏の観測結果を見るに、京都でもやはり雲の去來に悩まされたが、しかし、幸ひに午前2時40分から3時10分まで、半時間の間の空が可なりよく晴れ、此の間に中村氏は10個ばかりの微光流星を捕へ得た。此等から輻射點を導き出して見るに、

赤經 35° 赤緯 $+38^{\circ}$

となり、(これは見たまゝのものであるが)、可なり豫想の位置に近い。自分は之れを見て、萬歳を叫ばざるを得なかつた。——かうしてたゞ微光ではあつたけれど、半時間に10個のさういふ割合の流星は確かにスキエレル彗星からのものとして立證し得られたものと思ふ。之れは毎度ながら中村氏の鋭眼と熟練によるものである。

さて、去る六月25日、自分は英國ローヤル天文學會幹事 J. Jackson 博士から一通の手紙を受取つた、何心無く開いて見るに、中には肉筆でこまごまに御わびの言葉が書いてある。其の意は、「Crommelin 氏がさきの計算に間違ひのあつた事を見出した。輻射點の赤經は 33° であつて決して、第2象限には無い。それで Monthly Notice の三月號にあんな附加文を發表したここに付き、私は Crommelin 氏と共に大變残念に思ひます。こゝに平に御詫びを申上げる。何れ此の事は目下印刷中の Monthly Notices 次號で訂正する筈であるし、又、観測者たちには早速此の事を通知したから御承知を願ふ」といふのであつた。中村君は此の手紙を見て、手を拍つて痛快がつた。Crommelin 氏にも計算の誤りがあるのだ！しかし此度のやうな誤算は殊に罪が深いと思ふ。何故と言へば、輻射點を第一象限とする場合と、第二象限とする場合とは、實際観測のプログラムの作り方に大變な違ひがあるのであつて、特に、例へば9時半頃まで注意深い天空の監視によつて相當に観測者を疲勞せしめ、其れを安める間もなく、續け様に午前1時過ぎからの観測をするこゝになつたのだから、若し此の誤算が無かつたら、自分等も毎夜日没後の數時間をぐれだけ休息したか知れない、近着の Popular Astronomy (六七月號)を見るに、アメリカでも此の Crommelin 氏の計算を相當に尊敬してゐる前景氣であつたらしい。(終)